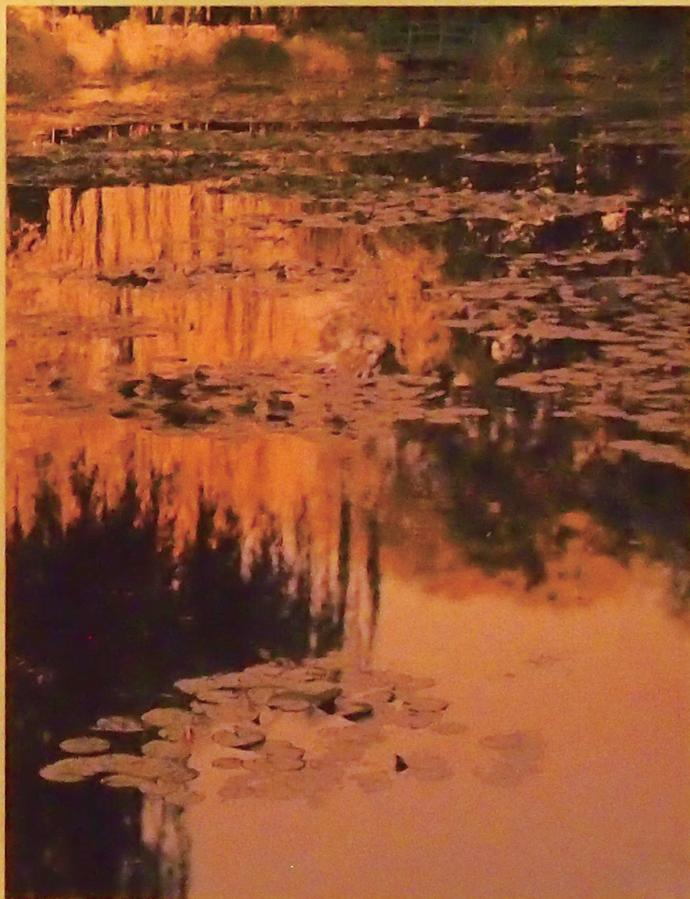


《睡蓮画・モネへのオマージュ》 平松礼二展



昨夏、フランス・ジヴェルニー印象派美術館で開催され、会期中7万4000人という同館始まって以来の入場者数を記録、さらに出品25作品すべてが館買上げとなるなど異例づくしの内容で反響を呼んだ《平松礼二・睡蓮の庭 モネへのオマージュ》展。今夏は隣国ドイツのベルリン国立アジア美術館で、ジヴェルニー所蔵作から厳選した作品による《平松礼二展 睡蓮画・モネへのオマージュ》が開催中だ。在ドイツ日本国大使館、ベルリン国立アジア美術館主催による同展、幕開けとなる6月11日のオープニングレセプションには、各国関係者が多数詰めかけ、平松礼二氏を囲んだ。氏の芸術のよき理解者であり、美術館館長、アートディーラー、美術評論という異なる立場に身を置く成川實、浅田淳一、石川健次の3氏の執筆で、世界にはばたく平松ワールドの魅力と可能性を見つめる。

in

ベルリン
国立アジア美術館

HIRAMATSU REIJI

SEEROSENBILDER PAINTINGS OF WATER LILIES HOMMAGE À MONET

Auf Initiative des Botschafters von Japan, S. E. Nakane Takeshi, präsentiert das Museum für Asiatische Kunst aus Anlass des 20. Jubiläums der Städtepartnerschaft Tokyo - Berlin eine Auswahl von Werken des 1941 in Tokyo geborenen Malers Hiramatsu Reiji aus dem Besitz des Musée des Impressionismes Giverny.

In dem Werken, Teil eines zwischen 2010 und 2014 entstandenen Zyklus, setzt sich Hiramatsu Reiji mit den Seerosenbildern des unter anderem von japanischen Felddruckern angeregten, französischen Malers Claude Monet (1840 - 1926) auseinander. Er benutzt dabei die Materialien und aufwändigen Techniken der neo-traditionellen Malerei Japans (Nihanga - wörtlich Japan-Bilder oder Japan-Malerei).

Beiden Malern dient der von Monet angelegte Garten seiner Anwesen in Giverny als Inspiration. Die in Materialität und Bildgestaltung insbesondere durch den konzentrierten Ausdruck eines verübten Jahreszeitenempfindens, deutlich japanisierte Version Hiramatsus führt den fruchtbarsten künstlerischen Austausch zwischen Japan und Europa lebendig fort.

It is with great pleasure that we present at the suggestion of the Ambassador of Japan, H. E. Nakane Takeshi, a selection of paintings by the well-known painter Hiramatsu Reiji (born 1941 in Tokyo) from the collection of the Musée des Impressionismes Giverny to celebrate the twentieth anniversary of the partnership between Tokyo and Berlin.

Hiramatsu Reiji refers to the paintings the suite of water lilies by Claude Monet (1840 - 1926), who him inspired by Japanese woodblock prints among others. Created between 2010 and 2014, Hiramatsu Reiji bears witness to his mastery of the traditional techniques and materials of the neo-traditional Japanese painting - literally "Japan painting".

Both artists draw inspiration from the garden designed by Claude Monet at his residence in Giverny, which is depicted in his paintings. Hiramatsu Reiji's version, which combines traditional Japanese materials and techniques with modern artistic sensibilities, leads the fruitful exchange between Japan and Europe to new heights.



私

が50年来愛してやまない〈現代日本画〉が世界画になった時、その場に立ち会うことが出来た幸運を神に感謝している。

昨年夏（2013年）、フランスのジヴェルニー印象派美術館（公立）で、平松礼二氏の新作個展が開催された。続く今年6月からドイツのベルリン国立アジア美術館でも開催されている。日本画が芸術の中心であるフランス、ドイツの、しかも公立・国立の美術館で開催されることは、それ自体が世界に認識されたことに他ならない。

まず昨年7月からのフランス・ジヴェルニー印象派美術館の平松礼二・新作個展は異例尽くしのもので、①公立美術館からの要望による展覧会、②出品全作品を美術館がコレクションする、③美術展に関わる一切の経費も美術館側が負担するという、正に夢のような企画であった。

これまでも日本画の展覧会が外国で開催されたことは何回もあったが、すべてが日本側からの売込みか、会場を借りて行うかのいずれかで、今回の平松礼二展の様に外国の公立の美術館が、氏の絵を高く評価して行うというこれまでにない快挙であった。このことは平松礼二の作品が世界に認められ、ひいては現代日本画が世界で最高の絵画であることを示す絶好の機会である。さらには日

日本画から世界画へ グローバルスタンダードと なった平松芸術

成川 實



平松礼二展《睡蓮画・モネへのオマージュ》会場となったベルリン国立アジア美術館

本の美術の歴史に於いても日本画が世界画になったという重要な意味を持つ。

西洋画の代表ともいえるフランスの印象派のモネやゴッホ等が日本の浮世絵に影響を受けたように、21世紀の今日、西洋では再び日本画の揺るぎない色と型の美を求めている。その代表が平松礼二の作品で、日本画の伝統を生かし、異文化とも交流して創造された平松芸術が世界に羽ばたく時が来たのだ。

既に報じられている通り、このフランス・ジヴェルニー印象派美術館の展覧会は大成功に終わった。会期中7万4000人という同館始めて以来の最高の入場者数を記録、さらに日本円で4500円もする図録が飛ぶように売れた。

幸運なことに私もこの展覧会のオープニングに参加することが出来たが、2日間にわたり両日とも多数の人で賑わった。なかでも特に印象に残ったのは、この展覧会の当事者であるジヴェルニー

印象派美術館のカンディール館長の熱のこもった作品解説であった。1点、1点作品の前で手振りや身振りの熱弁で、まさに異文化である平松芸術に心底惚れ込んでいることが直に伝わってくる。

日本では平松芸術については一部の人の間では高く評価されているが、まだまだ正しく評価されているとは言えない。それに対し外国人の聡明な若き館長が異文化にもかかわらず何故これほどまでに平松芸術に引きつけられるのか……。

カンディール館長はこの展覧会の実現を図るために、フランスから平松氏の自宅（神奈川県鎌倉市）まで何度も訪れ、さらには2011年9月に名古屋美術館で行われた『画家五〇年の軌跡・平松礼二展』（中日新聞社主催）まで足を運ばれた。

はじめは平松氏自身も半信半疑であったが、ここまで惚れ込まれれば男冥利に尽きる。それから一切の他の仕事を絶ち全身全霊でこの展覧会のための制作に没頭した。まさに人種の違いを超えて男と女の真情が結ばれたわけだ。

それにしても世界の今世紀の芸術の中から平松芸術を選んだカンディール館長の目は凄いと云わざるをえない。この展覧会にはフランスだけでなく近隣諸国からも多くの方が訪れ、平松氏の日本画は世界画になったのだ。

さらにカンディール館長の本心は、ここジヴェルニー印象派美術館を発信基地として世界に平松芸術の素晴らしさを展開していくことにある。その第1回として、現在ドイツのベルリン国立アジア美術館で『平松礼二展 睡蓮画・モネへのオマージュ』が開催されている（6月12日～8月31日）。



オープニングレセプションで行われた鏡割り。左から平松礼二、ベルリン国立アジア美術館クラス・ルイテンビーク館長、ジヴェルニー印象派美術館学芸員パネッサ・ルコント、在ドイツ特命全權大使・中根猛の4氏



展覧会場で。平松礼二氏（中央）と成川美術館館長・成川貴夫夫妻

すべての作品がフランス・ジヴェルニー印象派美術館からの貸出しである。もちろんルイテンビーク・ベルリン国立アジア美術館館長の要望によるものだが、中根在ドイツ日本国大使も積極的に応援している。

このドイツ展のオープニングにも幸運にも参加出来たが、やはり多数の来客で賑わった。その翌日のベルリン日独センターで行われた平松礼二の講演会も大盛況で、2時間にわたる説明にも誰一人退席することもなく熱心に聞いていた。我々日本人が考える以上に外国人が日本画に対し深い関心があることを肌で感じた。これまで日本人が積極的に発信しなかったただけではないかと。

何故、平松氏の作品が我々同胞の日本人以上に外国人に高く評価されるのか……。

日本の絵画の歴史を見ても、かつての浮世絵や琳派など、我々日本人が正しく評価しない間に外国人に買われてしまったという事実。そして世界的に評価されて初めて同胞の日本人が気づく。その時には優秀な作品は外国に持っていかれた、その歴史が今も繰り返されていることを強く感じる。戦後の日本人は工業をトップに理化学・スポーツ・音楽などあらゆる分野で活躍している。日本人の勤勉、努力、忍耐、発想力など人間的には世界でも一番であり、大きく成長した。しかし残念ながら美術だけが沈んだままである。では現代の美術、とりわけ日本の伝統ある日本画が今世紀の世界の美術から見て劣るのか？——そんな訳がない。

戦後の日本画は発想力、材質、技術の高度化に



ハイライト作品の一つ
《水と樹と睡蓮の交響楽》
(四曲一雙屏風/2011/
ジヴェルニー印象派美術館蔵)。
手前は李禹煥作品

より、稀にみる発展を遂げていると私は感じている。それなのに何故注目されないのか。その第一の理由は日本人の最大の欠点である「同胞の日本人を正しく評価せず外国のものが良い」という考えがあるからだ。そのことは大金持ちも外国の絵は名前で高く買うが、日本人の絵は買わない——という発想に繋がる。同胞の日本人を応援しようという考えは皆無に近い。これは我々日本人にとって大変に不幸なことだ。そこへいくと外国人は自国の文化を誇りに思い応援しようという姿勢が強い。特に最近の中国などは自国の芸術家を応援しようとする方向性が強く、現役作家の絵も大変な高値で取引されている。

日本画の材料は世界で一番素晴らしい。油絵の材料と比べ質的にも月とスッポンくらい違う。日本画の材料ほど純度が高く美しい絵具はない。

平松氏は〈現代日本画〉に対する絶対的な確信を持つ。現代の日本画は〈世界画〉に成り得るといふ堅い信念である。それが夢でなく最早現実のものとなりつつある。日本人がそれに気づくか、これも時間の問題である。

日本でも世界に認められたモダンアートという一部の突出した芸術は在るが、それは相対的に特殊な分野であって、絵画の王道とは違う気がする。私の考えでは、日本画はそういった軽いノリの芸術ではなく、レオナルド・ダ・ヴィンチやモネ、セザンヌらが偉大な芸術家であるように、現代の日本画家も世界共通の純粹絵画芸術に沿った美術家であるべきだと思う。

平松氏は西洋の印象派に影響を与えた日本の

ジャポニスムを研究し、国際様式としての世界画の先輩格である印象派を、フランスの現地を旅しながら全身で体感し、全霊で感応し、徹底して研究した。その上で日本人である以上日本画の歴史と伝統を踏まえて現代の新しい日本画の実現を目指した。

平松氏は現場に赴き徹底した取材、スケッチをする。しかし、その絵はスケッチしたものをそのまま映すのではなく、そこに平松流の構築性と緻密な計算、思想を取り入れ実写と違う生き生きとした絵画が生まれる。

具体的には浮世絵の様なモダンな構図、デザイン性、それに琳派の様な華麗な色彩。そして実写にはない、鳥・かえる・トンボ・蝶などを画面に取り入れた「遊び心」。これぞ平松流の新しい日本画である。私はそんな氏の絵を見ると、美しく夢の世界へ誘う実に楽しい絵であると感ずる。

日本画の歴史、伝統を踏まえ、それに革新性をもたらした日本画が平松芸術の神髄だと思っている。

平松氏の絵が世界に認められたことで日本画全体も世界から注目される日も近いことを希望する。現代日本画には氏以外にも素晴らしい作家が沢山いる。

最後に、最近聞いた話では平松芸術を世に送り出したカンディール・ジヴェルニー印象派美術館館長は3段跳びの破格の出世でボンビドゥーセナーの事務長になったそうだ。

(一般財団法人(非営利型) 成川美術館館長)